

玄関のない家

小さい頃、家に帰るのは玄関からではなかった。
虫を捕まえた時には、祖父のいる縁側から上り込んで、
お腹が空いた時には、母のいるキッチン脇の勝手口から飛び込み、
視と顔も合わせたくない時は、自分の部屋の窓から忍び込んだ。

家の“なか”での生活に惹きつけられて、
あるいは家の“そと”での生活に突き動かされて、
その日その時の“帰りたい”感覚によって、あらゆる開口が家への入口になった。
“なか”と“そと”二つの間に生じる“帰りたい”を滑らかにつなげる入口のある暮らしを考えてみる。

矩形の住宅地に立つこの家は少し歪んだ円形をしていて、
その壁にはいくつか開口が開けられている。
それぞれの開口の周りには、“そと”との関係によって“なか”のまとまりが生み出されている。
そのようなまとまりがいくつも集まって一つの空間になっている家。

“なか”のまとまりは住み手が見出す“帰りたい”次第で自由に組み替える。
時刻の数だけ、季節の数だけ、外での生活の数だけ、帰りたいが存在する。
住み手は、“なか”と“そと”の心地よいつながりを自らの手で発見しながら暮らす。

